

What's Osaka Fashion?

大阪ファッションを探せ

東京とも神戸とも違う大阪ならではのファッションはどこにあるのか。取材を進めていくと、派手なだけではなく、独自のセンスをもつ大阪の女性の姿が浮かび上がってきた。ここでひとつ疑問が浮かぶ。なぜ、大阪にはそんな女性たちの心を

わくわくさせてくれる「コレクション」がないのだろうか。パリコレ、東コレはあっても、大コレはない。いや、かつてはあった。平成16年まで毎年開かれていた「大阪コレクション」だ。なぜ、存続できなかったのだろう。(木ノ下めぐみ)



パンチを効かせて

Next オオサカ Collection

「パンチが効いてるね」。大阪らしいフレーズをキーワードにデザインしました。ファッションはもちろん、食べ物も、街も、どこをみても、人々が「パンチ」を効かせている大阪。情熱や活気にあふれた街を、さまざまな「赤」が混じり合うデザインで表現しました。

大阪のデザイナーの卵たちが思い描く「大阪ファッション」を紹介します。

藤本 真実さん



上田女子服飾専門学校30年



⑥第1回の大坂コレクション。本物のファッションショーに、観客もステージも興奮に包まれた
①若手デザイナーにチャンスを与えた「新人ステージ」。有望な若手が次々と飛び出した
昭和62年11月
平成3年11月

パリコレになれなかった①

大阪コレクションを開こうという機運は、昭和60年代に高まった。大阪出身の世界的デザイナー、ゴジノヒロコさんが「大阪を活性化したい。若いデザイナーたちが作品を発表できる場を」と呼びかけ、賛同した大阪府や大阪市、経済団体が開催委員会を結成。62年に第1回のコレクションを開催する。事務局の一員として大コレを支え、現在はイベントの企画運営会社を営む川嶋みほ子さん(55)は、開催委員会に加わっていた大阪商工会議所会頭でサントリー社長(当時)の佐治敏三氏が記者会見で語った言葉を今も覚えている。「糸を重さで売るのではなく、ファッションという文化を大阪から発信できる第一歩なのです」。とかく東京よりも下に見られがちな大阪のイメージを覆したい、という強い気持ちがあった。しかし最初は出品デザイナーの選考に難航した。コレク



ションにふさわしい若手デザイナーは、当時、大阪にそう多くはなかった。結果的にはゴジノヒロコさんや古川雲雪さんら、すでに地位を確立した一流デザイナーも加わって幕開けを迎えることとなる。62年11月25日。第1回コレクションの会場となったマイドームおおさか(大阪市中央区)には、この日を含む3日間で、事務局の予想を超える7千人以上が詰めかけた。「精いっぱいのおしゃべりをして会場に来てくれた。ショーが終わって帰るときにはみんな、モデル歩き。ああいう場が大坂にはなかったんです」と川嶋さん。ホンモノのファッションショーを大阪で「その思いを実現した喜びと興奮に、主催者も観客も包まれていた」。

当初は難航した新人発掘だったが、平成3年には、独立して1年以上の活動実績があり実力が認められれば、出品費無料、年齢も地域も国籍も関係なく出品できる「新人ステージ」をスタート。これが功を奏し、国内はもとより、ニューヨークで修業中の若手や、ロシア、韓国など海外からも参加が相次いだ。大阪のこだわりを捨てたことが、逆に大阪コレクションの名を高める結果となり、新人の登竜門として認知されるようになった。そんな中から巣立った1人が、9年秋の大コレに登場した「アリスアウェア」の船越保孝さん。ゴシックを核にした独自のファッションが国内外で人気を集め、昨冬には来日したレディー・ガガに作品を提供したことも知られる。「大コレは当時、関西唯一のメジャーコレクション。そこには東京に劣らぬパッション(情熱)があった。大コレに出ることに意義があり、強い憧れがありました」と振り返る。当時のショーでは黒いサテン地で目隠しをしたモデルが、黒いガゼ素材を幾重にも重ねたウェディングドレス姿で登場。花嫁のドレスから逸脱しているという批判を招きかねない作品だったが、事務局から「そのまま」と後押ししてもらったという。「大コレは活動の原点で、大切に育ててもらった場所と話す。若い才能が開く大阪コレクション。地方イベントの枠を超え、パリ、ミラノ、ニューヨーク、ロンドン、東京の五大コレクションに次ぐ大型ショーへと成長していくはず、だった」。

若き才能次々発掘 大コレは活気あふれ



「大コレは憧れでした」と話す船越保孝さん